



芭蕉翁發句集

乾



重堂私印

今冬毛一京極中川の寺よりこの

東山園海沖竹居と隠事(信)の事や

十一年に於て其年以迄(通)に於て

芭蕉公好む書句(代)活(之)の(通)に

母の(通)に(通)に(通)に(通)に(通)に

乙冊の(通)に(通)に(通)に(通)に(通)に

日記(通)に(通)に(通)に(通)に(通)に

重堂私印

門人の古きる集り輯録一と刊行
の巻のあやまらぬと別冊の巻の
と著述一とまじりて一冊の
様子のと甚なる集り一と小冊
物一と花鳥月之好みと袖の
あし一とあしと書林井の
乞ふと一と花のうらや
と一と一と一と一と一と一と

次々々書きたる一と蔵書
其のうらやのうらや
年一と一と一と一と一と
さのうらや一と一と一と
平一と一と一と一と一と
ふと一と一と一と一と一と
けのうらや一と一と一と一と

て百五十巻の...
思ふ...
正...
あふ...
あふ...
あふ...

蝶菱切所書

芭蕉翁数句集上巻

春の部

庭洲の...
裁...
...
山...
...
...

歌也ふらぬ半一紙きく一紙いりて
書本に書かぬの如きかゝるは
のこりぬ
候りいさく一紙

二りあやぬく一紙一紙の
まじりぬきぬの如きかゝるは

え日尔田一と地日一紙一紙

都の如きかゝるは

薦地をくすしぬの如きかゝるは

湖の如きかゝるは

三日口地をくすしぬ

左陣画の筆の如きかゝるは
や積りぬきぬの如きかゝるは

くやうのあまももつと 鏡の表のうら
直さゆふふと 子や侍のあたら
子りく都く行く友もこのま
古畑や暮はまの 田ととも
とくくはれは暮はまの 地取のま
甚女弱中くはまの 暮はまの
一と暮はまの 一と暮はまの

くくくくく 柳のくくく 菰の暮
芳るるや 餅平暮はまの 暮はまの
このあまの 牛と暮はまの 暮はまの

物竹のあまの暮はまの

あまのあまのあまの 暮はまの 暮はまの
侍のあまのあまの

暮はまの 古畑と暮はまの 暮はまの
秋風くくく 暮はまの 暮はまの
暮はまの 暮はまの 暮はまの

櫻子の花も可なりあはれいひいひ
くめんさくおきく〜炭くぬきを
あはれそひう〜流きう〜桜の花

山家

手白果のむらさきくもえぬ
侍野山家からに〜あまのむすの
切出〜あまのむすのむすの
喜あ〜

香ゆめ白く〜にはふふ国のむえの舞
門人来らるの〜り馬の鈴〜
あまのむすのむすのむすのむすのむすの
侍の神垣の内〜むえ〜あまのむすの
く〜のむすの〜あまのむすの
あまのむすの〜あまのむすの
細代西のむすのむすの
梅のむすのむすのむすのむすの
園女のむすのむすの

暗窓の奥の申う——北の栞
山里を万の車送——く免の巻

卓袋亭月待

白まらやう免のうけあ——小山伏
甲のこのう栞のうや 牛の鞭
長もや——と——のふ月と栞
去年の元（まき）の半おとさやまを
良薬のこ——と——く免の巻
ある香——のし日の出る山路の雪

何来新ハ去年は三月十日をあう——

一周忌の経文栞のうのう——
う免の巻う——と——く免の巻
い免の巻——と——く免の巻
水栞のうのう——と——く免の巻

乙丹の江戸へ行く回

栞の葉——と——く免の巻
く免の巻——と——く免の巻
う免の巻——と——く免の巻

其の石環を一睡の橋を柵

はきもの平さつ系神の志好く

八九百石を雨降るをよの

舞止押あけこの物柵

日暮あれやうちもよきしの朝表

吉歌一若はふりまこ二句

味あふくまもはなまはるへ

来りるのこつこつと下可難

尾井のふりまも

まきもやとて富をまきの

まきのまきまきのまきの

まきのまきまきのまきの

けふもやまきのまきの

春雨のまきのまきの

浮雲の園ははのまきの

まきのまきのまきの

のまきのまきのまきの

陽光のまきのまきの

而さしや果雄の草花 花のあり
強新く行人人々

穀のふるまふまふよちのあく
油のふるまふまふ田稼のほ土のいぢぢあ
産のふるまふまふ白果のふるまふあぢぢあ
暖やふるまふまふふるまふまふ 一寸

雷別

結の子花ふるまふまふふるまふ
現の果花

ふるまふまふふるまふふるまふ
老傭

蛎ふるまふまふ海苔はは老のふるまふまふ
ふるまふまふ

海苔汁の子花ふるまふまふふるまふ
ふるまふまふふるまふふるまふふるまふ

二月まふまふふるまふ
水ふるまふまふふるまふふるまふ

是の橋の利弊ふるまふふるまふふるまふ

初年小瓶の刺——~~頃~~の南

伊勢の女

神垣中よりいもつけを 後盤の縁

神路山に出るこゝ西行の道に志を

惜むるは信行 止——は二句

裸の身中しつかんし 起の女に

河のよめの身あはれをよみて 白く

花子 陰後

唐土の船 浩こゝろし 飛 蝶

蝶の飛 斗り 野中 一 踊 新 沙

起 子 一 あら 友 女 せ しく 如 蝶

くん 才 亭

蝶乃羽の舞 彦 歌 堀 志 や 〇

古 池 中 陸 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

あ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

京 中 や 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

雲 花 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

高野 〇 〇 〇

又毎の物りも一匹の
心も中の子もさし
蛇もよもよも一匹
掃平一匹も一匹
蝶も一匹も一匹
若さのしよも一匹
田家も一匹も一匹

麦も一匹も一匹
猪の尾も一匹も一匹

湖を眺む

辛さ現の春も一匹
春も一匹も一匹

二股も一匹も一匹
鹿の角
鹿の尾も一匹も一匹
鹿の尾も一匹も一匹

杵折之歌

山路も一匹も一匹
山路も一匹も一匹

呂丸く縁ゆきて死せし秋のこも

老女帰らば ありては家の生れぬ

善徳山

山守の山——と告よけ老女

二、余軒

菊姫門をむきしりてのこゝろ

顔氏尚会方脚の人もはるまじ

物のたはひ先づか萩のふり葉のな

茅舎の画賛

岸とく 草屋ふやきしりてのこゝろ

舟舟は信ふもやまむしりてのこゝろ

青柳の浪もきしりてのこゝろ

信の方き人もはるまじりてのこゝろ

くはるまじ

茶のくちも信のゆゑも世を離るる

伏見西宮寺信上人のこゝろ

藤原も信のゆゑのこゝろ

山守のこゝろ

西の子小孫と伝ふるや草の鏡
如く餅一也味如く七集
味之如く中より物十九

伊賀上野薬師寺初書

初さくおもとくまよき日如く
顔も如くおむも如く
な良七重七重無層八重如く
この如く

弟の履の履おむ如く

出れり大年如く七重如く

命

命ふく中如く如く

山さく尾如く

探虎子の如く

如く

さく半如く

如く

如く

桜のうらみかきしりては日かたし
あまのまほひのしほや歌のたれ
あ

山家

秋の葉半一葉のぬのたを
似合しや下きの初めし
木のあきけも能くしりて

万年別野

春のあきけも能くしりて
花のちり

白雲の文

〜かたり〜
所々園地も花半し
馬も能

愛方知酒聖貧見錢神

花のちりも能くしりて
世のあきけも能くしりて
葉のあきけも能くしりて
花のちりも能くしりて
葉のあきけも能くしりて
花のちりも能くしりて
葉のあきけも能くしりて

と水雲も又七日鶴見の藤の籠
物皆自得

花も花も花も子々ひそかき
鶴の巢もくくくくくくくく

竹の層

花のよき諸君と上野の海舟
おぼろげもとうや否の老来は
半あくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

の外もおぼろげ
路も道も若の懐くくく

と云くくくくくくくくくく
新市も若も猿もくくくくくく
くくくくくくくくくく

花も花も花も子々ひそかき
鶴の巢もくくくくくく

けしけしけしけしけしけし

新門のむら

海のむらむらむらむらむらむらむら
草花のむら

山を、日、海、花、月、草、花
草花のむら

花の伝、海、山、花、月、草、花
花の伝、海、山、花、月、草、花

花の伝、海、山、花、月、草、花

花の伝、海、山、花、月、草、花
花の伝、海、山、花、月、草、花

花の伝、海、山、花、月、草、花
花の伝、海、山、花、月、草、花

花の伝、海、山、花、月、草、花
花の伝、海、山、花、月、草、花

花の伝、海、山、花、月、草、花
花の伝、海、山、花、月、草、花

下中をきりし水花ちのり子孫のや
藤半と鶴あまのこ

七手は雲をたやあ古き一殿作

好願の酒を飲まの記あり

思ひをくまひの心くぬの波

尾尾く人きく流居一橋あふれ橋

茶一握りく一門人あふれむ

飲めくく生花あせり二年少橋

蕭山のりく免き探雪の画を翠の燈

あふるやうもねく琴の茶

傍専吟録別

頭の花はあまの山あまあとの

あふれく

あけゆくしあもあくくあまの庭

急床子深川の橋を渡り

花りくあきすあま一柳く京

橋をたるとあまあまあま

あまあまのあまあま

上野の茶屋にまゐりてはるる人々を
 見れば、あつたる者も、いふは、あつたる
 事なり。

日し、五畧の、その後、あつたる、
 支老東行録別

けし、後、あつたる、
 幅幅、あつたる、
 路面、あつたる、

多、あつたる、
 の、あつたる、

言、あつたる、
 脚、あつたる、

丹波帝、あつたる、

の、あつたる、

西河、あつたる、

あ、あつたる、

かゝるものもなきに似たり

一画二文

山崎の草一平信の字は
自字の草と云ふは花の成り
とを言ふなりと云ふは
高しき草と云ふは
いふなりと云ふは
初候なり

清持の草と云ふは
何れなるものなり

しるしの草と云ふは
海草と云ふは
草と云ふは
つらと云ふは
草と云ふは
草と云ふは
草と云ふは

牛の部

牛の部は
牛の部は
牛の部は

夜に海をゆく風波をたどる

詠所

一ツ統とく後らわあしむいんたもこつえ

月〜〜〜山田の海〜〜〜

浪〜〜〜車もあつた〜〜〜鄭一玄

海〜〜〜花もあつた〜〜〜

ま〜〜〜あつた海〜〜〜

は〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

古戦場〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

浪〜〜〜あつた海〜〜〜

海〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

あ〜〜〜あつた海〜〜〜

短冊得たせよと云ふは
るる侍ふとのかき

神保橋平馬車に上りて

下上一周忌終日参詣

子知人等も好むまじり

京中も京水りや保く

崎の坂も

冒険つたり一筋はも

本とては常也五火の

あつては常也まじり

馬城常の常也まじり

何とては常也まじり

中とては常也まじり

暇やとては常也まじり

四月の強ひり

常也とては常也まじり

常也とては常也まじり

常也とては常也まじり

清佛一が敵手有る其取疎の事
言ふ事あるも事一に事ある事
格の事あるや 危なる事ある事
國是事大願和尙こと一に事ある
こと一に事ある一に事ある事
こと一に事ある一に事ある事
こと一に事ある一に事ある事
こと一に事ある一に事ある事

梅意事ある事ある事ある事
其南の事ある事ある事

事ある事ある事ある事
ことある事ある事ある事
事ある事ある事ある事

杜事ある事ある事ある事
方事ある事ある事ある事

事ある事ある事ある事
山事ある事ある事ある事
事ある事ある事ある事
事ある事ある事ある事
事ある事ある事ある事

古新の海もあつてゝ。のちこゝろに
のちこゝろに海もあつてゝ。のちこゝろに
もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。

白芥子にねも〜蝶乃〜。のちこゝろに
海人の新也あつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
のちこゝろに海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。

海人の新也あつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
伊豆國極々小浜南門は海もあつてゝ。のち
のちこゝろに海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。

甲斐の國はあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
行舟の海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
海の海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。
武蔵の海もあつてゝ。のちこゝろに海もあつてゝ。

丁馬の徳川の向坂のふかき
しきの徳川のふかきにはいも
二度相見ふは海の子あしこや東へ
下らんこぞは

あらん葉ふらんあらん松のあはれ
徳川陣の宅自画の自費

寒らんこぞはあらん
招き寄りて燈具あつた
仲三目とせはあらん
あらんこぞはあらん

青きあらん
日光あらん

あらんこぞはあらん
河原の浦らん

すかん寺らん
空を穿て奥の山居の
跡あらん

木塚も庵もあらん
石山の奥もあらん

控多め取居あり 如位巻上りは
ぬ家殿の侍境いし ありて身眼をいし
侍連は知れぬこと ありて身眼をいし

先平のむねのよも ありて身眼をいし
本風より ありて身眼をいし
法座のよも ありて身眼をいし

甲斐山中

山崎のれい ありて身眼をいし
泉山麓の志 ありて身眼をいし

大垣の山崎 ありて身眼をいし
落し ありて身眼をいし
雀のよも ありて身眼をいし
画賛

了不 ありて身眼をいし
落橋の如 ありて身眼をいし
も ありて身眼をいし
袖 ありて身眼をいし

殺生をなす

下りの書も 交りあへくも

高類

書出中兵しもろゆ女のあし

中の一の書も 交りあへくも

高類

しもろゆ女のあし

高類

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

高類

しもろゆ女のあし

しもろゆ女のあし

信士の心はあはれなるも月日昔年古園来る
物見たりも口をや死せしとせむ

花あやむあし一はれあしの事し
清き流るる自の旧跡の寺に幾流るる日
年慶るるやとくやとく付物とせ

あやむも古口も七月あゆまれ御殿
仙三子入るやあゆまれ日し盡るる
あやむのまの神の流流るる御殿の
あやむの心はあはれなるも月日昔年古園来る

藤流るる片の月日昔年古園来る
御殿の心はあはれなるも月日昔年古園来る

賢とくくく空の歌 蒼一己月日昔年古園来る
はれなるも口をや死せしとせむ

善徳の心はあはれなるも月日昔年古園来る
心はあはれなるも月日昔年古園来る

光華の心はあはれなるも月日昔年古園来る
光華の心はあはれなるも月日昔年古園来る

風平や少の金の桂子相雪はきり
乙卯雨のぬるけりこも 光堂
あつたまはあつた早一立上川
日の海や 葵こころか五月雨
花掃雪こころ

とみかぬや 色は白きかたの初
伝ふた葉や 春こころ 葉の初
露沾ふかき行ふ

五月も平し 所はは葉はこころ行ふ

大井川のあつたまは田家平白の初
とみかぬ

竹もかれのおもひもあせり井川

五月十日は富士の山は出づる

目かゝるも 花も五月ふ二
路河路や 花も葉の白じ
肩掃や 侍中しそ ぬるま
つくりと 後のむら 袖入り ちぢ
しらんしと 標や 白の流るる

素門に白亭の目録
尾崎とてせしむるの
系図も一雨平一為
葉の事後所為の事
傍ありし可伸といふ

世の人の心身也
奉白といふもの
しせとてさうし
様とて三月六日

世の事なるや
あらさしむる
落柿舎

袖の事
赤川神六
権の事

山申
登風

この境をめぐりてはあつた
夏のうらみ

いづれか〜角塚〜
ふか〜〜

本曾路の藤田にちよと大田

この境をめぐりてはあつた
茶の葉ははる〜花は〜

藤田に云見

いづれか〜
こらから〜

真州白川

関守の者〜
大津御倉

大の〜
大に〜

水鏡を〜〜人の心もなほ
新白〜〜の心もなほ〜〜暮
〜〜の心もなほ〜〜

〜〜の心もなほ〜〜川
新舟の通る心もなほ〜〜

花の心もなほ〜〜新舟
雨の心もなほ〜〜早苗

〜〜の心もなほ〜〜田
〜〜の心もなほ〜〜

〜〜の心もなほ〜〜
〜〜の心もなほ〜〜

田〜〜の心もなほ〜〜
奥州年の白川もなほ〜〜

〜〜の心もなほ〜〜
西〜〜の心もなほ〜〜

〜〜の心もなほ〜〜
〜〜の心もなほ〜〜

〜〜の心もなほ〜〜
奥の田〜〜

寺のあゆむともちまをたて候事
早苗のたももしむむのきり
しんやーののりや 田植
及深くて種まき
世は終り一代のくお田は行の
羽黒山も落つ候事
重行亭にて
ふんはーのふんはーの
嶋田家の中

佛眼目

皆もも佛種の日を善し
明石の地
地臺やーののり
月夜にまももしむむの
手もしてはも種まきの月
おりのあり由りし出く赤坂

曲相楽亭

あつた後申の道達を明くして
精進ありし山彦を尋ねて
福をふらして

持鏡をひきこみて
直下を尋ね

軍をふらして
無常の迅来

海のうらみありし
人ありしとて

心もや歌なり
盤斎のうらみ

困るをよみて
山彦のうらみ

命ありしとて
風瀑のうらみ

日よそをよみて
破風にありし

長谷川十八楼

けいふるの月かえりゆくもの皆降
屋敷の風は

涼しく秋の初めさへあはるる
すくすくやあの日月や明黒山
あつちの吹海へさきさき
浪よとちか股あはれと海へ
花の上清しよとれと根の老木
西行法師の記高のつた
つらつらとあはれと水たのた

小瀬ささき柳ささきとささき

四糸河原細涼

川原を流るる水はあつちの海へ

田原

あつちの海へささきとささき

川中の根よあつちの海へ

野水子やあつちの海へ

あつちの海へささきとささき

あつちの海へささきとささき

疎くもよほしき中野松の枝をうけ
てしるさゆきをくくくくくくくく
月のまも南女近くくくくくくく

羽黒山

あしつらやうさかたのくくく南居

又山の傍も湯き

風差にたれ織を襟もつくくくく
漣も風もくくくくくくくくくく

少倉山常寂寺に

雪を物にほめくも 風の薫る春
雪のまにくくくくくくくくくく
湖もくくくくくくくくくくくく

本間主馬の家名取

くくくくくくくくくくくくくく
草のまに 目やのくくくくくく
又白のふくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく

吾れを母の懐にまゝに抱か
れし氣のけしきに思ふに
るはふちやるるに思ふに
中由の海く又のきき

と云ふの牛一初ふ麻せむ
何れを母の懐にまゝに抱か
れし氣のけしきに思ふに
るはふちやるるに思ふに
中由の海く又のきき

るはふちやるるに思ふに
中由の海く又のきき
と云ふの牛一初ふ麻せむ
何れを母の懐にまゝに抱か
れし氣のけしきに思ふに
るはふちやるるに思ふに
中由の海く又のきき

我々此れ二つありて一に常風
ふりのなむいふに神也 蓮花野
正成儀 鐵肝石心此人之情
梅よめいふに月や梅のつゆ
醉くを梅の梅子咲ふに花の
藤の空を流るる花の流
うしめし梅の梅子咲ふに花の

岐阜山

此山は古井の古くも

那原の温泉明神の御殿ありて
八幡宮の御殿ありて
一方に梅の影あり

湯はしきふれも同く石は水
しきふれも同く梅の影あり
昔の御殿ありて

雲形かきかきありて
ふ子かきかきありて
梅の影ありて

あまのついでに小袖も穿てて 上田へ

従後交りてすも行者堂の流も

方山小足路は流し方楽うの

新道より海を渡る

山もなほとて山又あやむ

山崎

流しやふりていふも其は海

新道は月夜草

水のかき 水は草のたけり

早舟の川海舟又さうりて

水舟の舟を流しぬるは

ふりて舟を流しぬるは

六月の舟を流しぬるは

ふりて舟を流しぬるは

舟のかき 舟は草のたけり

舟のかき 舟は草のたけり

世の舟を流しぬるは

舟のかき 舟は草のたけり

新刊の書より新比より新刊の書

新刊の書より新比より新刊の書

